宣敍正四位上

藏人頭右大辨藤原光宣奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

十一月廿八日　右少辨長敎奉

進上　山科大納言殿

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

十一月廿八日　右少◎大カ辨光宣奉

進上　山科大納言殿

宣旨

從五位下卜部兼任

宜任神祇權少副事

右宣旨、可被下知之狀如件、

天正四年十一月廿八日　權大納言判

大外記局

宣旨

正四位下藤原輝資朝臣

宜敍正四位上事

右宣旨、可被下知之狀如件、

天正四年十一月廿八日　權大納言判

大內記局

○十二月大

一日、己未、天晴、八專、○神樂庭火吹之、繆唯識論看經大方沙汰之、○三條亞相へ罷向、葉室同道、柳一荷兩種等被攜之、見參酒有之、次殿下へ參、葉室何へも同道、御見參御酒賜之、次九條殿亞相へ參、御他行云々、次近衞殿へ參、御留守云々、次御靈殿へ參同前、次安三位所へ罷向、女房客在之、次一條殿へ參、御客人共有之、及大飲、次安禪寺殿へ參、御留守也、於昌藏主酒有之、次大祥寺殿へ參、御見參、次德大寺へ罷向、酒有之、次歸宅了、○內藏九獻御樽一荷兩種如例臺所へ進上之、○木村越前守所へ晚飡に罷向、龜千世、松若等迄有之云々、次方違如夜々、今日四人衆江州安土へ下向云云、○禁裏御祝に不具之間不參、左督參內、天酌に被參之輩親王御方、持明院中納言、左衞門督、源宰相中將、左大辨宰相、通勝朝臣、爲仲朝臣、範國、慶親、橘以繼、源元仲等云々、御方御所御酌同前云々、次於御所口內藏九獻御祝如例、左督計云々、

二日、庚申、天晴、八專、自亥刻雨降、○陰陽頭久脩來、理髮作法尙稽古、勸一盞了、竹田伊與守來談、勸酒了、○總在廳隆丶來、錫擕之、自他受用之、就南都維摩會、僧口◎カ衆前奏之事尋之、古口◎カ筆悉過去帳之間、大方予注之、四十聽衆廿三人有之、尙東寺醍醐以下可相尋之由示之、黃昏木村所へ方違罷向、如夜々、

三日、辛酉、八專、陰、○自殿下爲御使いせ丶丶軒來、對面、現任之大中納言參議以上廿二人有之歟、維摩會に自南都尋申之故也、彼會に現任之公卿祈念之故也、

四日、壬戌、天晴、○自廣橋神宮長官守雄加級之下知到來了、○左督瘧病、今日迄四度音信了、不可說々々々、方違如夜々、

五日、癸亥、天晴、八專終、○廣橋、朽木長門守來談、勸酒了、長門守調中散入口口人參丁香散、保童圓、五靈膏等方懇望之間、相口◎カ調了、方違如夜々、○上藺、大典侍殿、臺所、內侍所等徘徊了、陰陽頭來、理髮之作法尙稽古了、

六日、甲子、小雨晴陰、○自廣橋下知到、御仕丁山國女之子忌明、強餅◎カ飯錫送之、

八日、丙寅、天晴、○御方御所へ參、御乳人茶子にて御茶賜之、次上藺、大典侍殿、臺所等へ立寄了、方違今日迄之間、木村越前守所へ柳一荷、兩種強飯鯛二、遣之、同黃昏罷向、強飯にて一盞有之、越前守四五日烏羽へ罷向留守也、源二郎母出合了、無事に四十五夜滿之間、自他滿足了、小川善太夫男子誕生云々、餅錫等送之、○安三位所へ予笙灌頂之日次申遣之、則到如此、

笙之御灌頂日次

今月八日丙寅　時午

十三日辛未　時未

十二月六日　有脩

同左督曲傳受之日次申之、

曲御傳受日次

今月十五日癸酉　時◎缺字カ

十六日甲戌　時　　有　脩

竹田兵牛玉祭之間晩飡に呼、相伴予、下冷泉、中院、亭主、中御門、上冷泉、大和宗恕等也、飯以後數寄之座敷にて茶有之、次盃出、音曲及大飯、予方違之間早歸了、○左督冷泉へ罷向、田樂錫等攜之、夜半計歸宅了、今日瘧病不發之間滿足了、○平野大和入道、右衞門尉等昨日之禮に來、對面、粟津供御人商買物、スリコ鉢、二條殿關白役被留之、諸際之由以平野申分、今日被返之了、九日、丁卯、曉天雪降、十二月節、小寒入、寒風（自今日實一刻加）○長橋局へ參、御直衣御服明後日可出來之由申間、御總用可被相渡之由申之、銀子先日七十七匁目被渡之、殘二百五十八匁目被相渡了、四十七□□有之、○竹内殿へ參、三宮御方へ栗進之了、十日、戊辰、曉天雪降、五墓日、○五條大内記爲名被誂之表袴指貫等、仕立出來之間持遣之云々、○近日到來之下知共大内記局務等下知之、

天正四年十二月五日　宣旨

左近將監多忠隆

宜任上總介

左衞門少志多忠治

同　久能

已上宜任左兵衞少尉

藏人左少辨藤原兼勝奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

十二月五日　左少辨兼勝奉

進上　山科大納言殿

宣旨

左近將監多忠隆

宜任上總介

左衞門少志多忠治忠雄子也、

同　久能久氏子也、

已上宜任左兵衞少尉事

右宣旨奉入如件、

天正四年十二月五日　權大納言判

大　外　記　局

龜千世從晩賀茂へ遣之、自明日令神事故也、○小川善太夫所へ御服之代銀子四十七切、百五十三匁、ほた、持遣之、十一日、己巳、天晴、○大内記へ下知共調遣之、如此、

天正四年十二月四日　宣旨

從四位上荒木田守雄神主

宜敍正四位下

藏人左少辨藤原兼勝奉

○口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、兼勝誠恐謹言、

十二月四日　左少辨兼勝奉

進上　山科大納言殿

宣旨

從四位上荒木田守雄神主

宜敍正四位下事

右宣旨、可被下知之狀如件、

天正四年十二月四日　權大納言判

大　内　記　局

長橋局へ參、御服御裏絹代御調料等早々可被出之由、千代保に申付了、次上臈以下所々徘徊候了、十二日、庚午、天晴、○亡父卿忌日之間、松林院性心齋に來、相伴了、○薄來、萬里小路同道、御髮上之壇之事談合、巽東可然歟之由示之、十三日、辛未、天晴、○雅樂頭守秋朝臣來、朝飡相伴了、未刻予笙灌頂沙汰之、累代之妙音天掛之燒香、菓子三色荒米御酒等供之、一部之譜英秋筆取渡之、荒序譜同信秋筆取渡之、譜共守秋老筆難叶之間如此、奥書持來如此、羅陵王荒序、譜在別紙、當曲者當道之淵底深奥極祕也、不殘口傳故實、所奉授山科大納言殿者也、

天正四年十二月十三日

從四位上行雅樂頭豐原朝臣守秋判

次太刀、代五十疋、馬一疋代口百疋、遣之、次尊盃頂戴之、景長朝

臣珍重之由申來、勸酒、次兩人に小飯申付了、次參內、德大寺大納言還任之事、以長橋局申入之、於御三間御酒音曲有之、予、持明院中納言、新宰相中將、通勝朝臣、橘以繼、源元仲等也、

十四日、壬申、天晴、○柳原へ罷向、見參、於黃門方一盞有之、明日南都へ下向之間、積藏院中時家所へ書狀被傳了、○禁裏御煤拂之間、爲御見舞參內、被參之輩中山前大納言、予、源大納言、持明院中納言、四辻中納言、甘露寺中納言、藤宰相、源宰相中將、左大辨宰相、新宰相中將、通勝朝臣、爲仲朝臣、盛長朝臣、兼勝、永孝、範國、充房、橘以繼、源元仲等也、於男末湯豆腐如例、次親王御方、長橋局等羹祝各如例、次薄所へ罷向、五六人嘉例莖口口一盞有之、次於內侍所不殘各小飯酒有之、次於男末各入麵酒有之、次各退出、○德大寺大納言還任之事勅許也、此由以使者申遣了、○禁裏御直衣御服、小川善太夫宗久織出八丈、亥刻持來了、御文小奬、

十五日、癸酉、天晴、○自早々守秋朝臣來、左督蘇合香一具相傳了、掛本尊御酒燒香等如常、朝飡申付之、祝儀計百疋、太刀金遣之、○安三位使有之、藥之事道三令故障之間、爲禁裏被仰出間、令療治之事披露賴入之由申、厚紙一帖送之、則大典侍殿へ參此由申入、時通朝臣に申談、道三に能々可申聞之由御返答、則西洞院へ可罷向之處、他行之由有之間、予道三所へ罷向、他行云々、同玄朔所へ罷向、同前之間委申置了、次安三位所へ罷向、從禁向此由申聞了、○左督先予安三位所へ罷向、從禁、御使云々、別殿之御日次方角等之事與云々、次柳原一品へ罷向云々、次黃昏中山相公へ田樂錫等擕罷云々、○自安三位眞名曆到之間令書寫之、○中御門維摩會勅使に下向云々、柳原黃門同道云々、同三條亞相、甘露寺等爲社參下向云々、

十六日、甲戌、天晴、○道三、玄朔兩人來、安三位事被仰下之間、藥五包可遣之、脈惡候上、少腫氣有之間、重不可與之由、得其意可申入之由申之、

十八日、丙子、陰、○養母唯心院玉林貞松忌日之間、松林院之性心齋に來、相伴了、

十九日、丁丑、天晴、自戌刻小雨降、○亡母忌日之間、淸和院之西坊良椿齋に來、相伴了、○近日從所々下知到來、今日令下知了、

宣旨

正二位藤原朝臣公

右宣旨、宣還任權大納言

天正四年十二月十四日　權大納言（花押）

大外記　局◎口宣并ニ奉入缺、

天正四年十二月十六日　宣旨

正三位藤原朝臣永

宜敍從二位

藏人頭左中辨藤原輝資奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

十二月十六日　左中辨輝資奉

進上　山科大納言殿

宣旨

正三位藤原朝臣永

宜敍從二位事

右宣旨、可令下知之狀如件、

天正四年十二月十六日　權大納言判

大內記　局

天正四年十二月十八日　宣旨

正五位下藤原兼勝

宜敍正五位上

藏人頭左中辨藤原輝資奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

十二月十八日　左中辨輝資奉

進上　山科大納言殿

奉入宣旨

正五位下藤原兼勝

宜敍正五位上事

右宣旨奉入如件、

天正四年十二月十六◎八カ日　權大納言判

◎宛所闕、
◎宣旨闕ク

口宣一紙、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、

宣旨

正五位下秦重淸

宜敍從四位下之事

右宣旨、可令下知之狀如件、

天正四年十二月十八日　權大納言　判

大內記局

越州北庄松尾所愚息女阿茶書狀有之、愛宕之者但馬持來、樣體雜談、勸一盞了、中折一帖到、左督、薄等へ鳥子十枚宛送之、

廿日、戊寅、雨降、○松尾之松室中務大輔重淸四品之事、一昨日葉室披露、勅許之間、長橋局へ柳三荷兩種干鮭二、豆腐一折、進之、予持參、盃被出酒有之、次大典侍殿へ參、無殊事、自松室錫兩種等進之、○鞍馬寺之戒光坊歲末禮に來、炭一俵卷數札等送、盃令飮、御祁尾二十疋進之、

廿一日、己卯、天晴、土用入、○禁裏冬御直衣御服出來之間、晚景予長橋局へ持參了、次藤相公へ罷向、明後日拜賀云云、仍見舞、用之事可被申之由示之、沓二足可借用之由被申候了、

廿二日、庚辰、天晴、○南向母儀正貞忌日之間、西方寺之知慶齋に來了、○葉室弟宮松甘露寺へ歲末之禮に上洛、他行云々、次兄弟今日被歸在所了、自藤相公淺沓被借之間二足遣之、○藤相公へ柳一荷、兩種鯛一折混布同遣之、安三位所へ新曆之本返遣之、○黃昏藤相公へ罷向、衣文入道令着之給、右衞門佐に衣文予令着之、戌刻出門、祝儀如例、一身三盃、次雜煮吸物等三獻如例、相伴之人數飛鳥井亞相、予、庭田亞相、四辻黃門、甘露寺黃門、亭主、源相公、烏丸辨、日野辨、飛鳥井羽林、水無瀨羽林、廣橋辨、右衞門佐、極﨟等也、今夜僮僕布衣侍一人、雜色六本、白張一人、烏帽子着十人計、右衞門

佐雜色二本、白張一人、烏帽子五六人在之、沓右佐被取之、次立砂之外にて家拜有之、次於弓場代舞踏如常、申次極﨟也、經無名門神仙門登殿上、經上戶布障子より參、於御三間御對面、御盃頂戴、次御方御所へ御禮被申歟、堂上以後予則歸宅了、南向戌刻俄蟲發被煩及難治、但麝香丸三度與之、半時計にて平癒、各滿足了、

廿三日、辛巳、天晴、○妙順忌日之間、松林院舜玉西堂齋に被來、相伴了、○自藤宰相沓二足被返送了、松木相公熨斗鮑百本被送之、祝着了、○嘉例今日煤拂、大澤右兵衞大夫來、龜千世以下也、○新調之袍蠻唐草、小川善太夫織出持來、滿足了、○自廣橋到六條少將下知、局務に下知了、如此、

天正四年十二月十七日　宣旨

侍從源有親

宜任左近衞少將

藏人左少辨藤原兼勝奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

十二月十七日　左少辨兼勝奉

進上　山科大納言殿

奉入宣旨

侍從源有親

宜任左近衞少將事

右宣旨奉入如件、

天正四年十二月十七日　權大納言　判

大外記局

天正四年正月五日　宣旨

從四位下源季通朝臣

宜敍從四位上

藏人左少辨藤原兼勝奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

正月五日　左少辨兼勝奉

進上　山科大納言殿

宣旨

從四位下源季通朝臣

宣敍從四位事上

右宣旨、可被下知之狀如件、

天正四年正月五日　　權大納言 判

大内記局

天正四年十二月九日　宣旨

從四位上源季通朝臣

宣敍正四位下　　藏人右少辨藤原長敎 奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

十二月九日　　右少辨長敎 奉

進上　山科大納言殿

宣旨

從四位上源季通朝臣

宣敍正四位下事

右宣旨、可被下知之狀如件、

天正四年十二月九日　　權大納言 判

大内記局

天正四年十二月十八日　宣旨

正五位下藤原長敎

宣敍正五位上　　藏人左少辨、、兼勝 奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

十二月十八日　　左少辨兼勝 奉

進上　山科大納言殿

宣旨

正五位下藤原長敎

宣敍正五位上事

右宣旨、可被下知之狀如件、

天正四年十二月十八日　　權大納言 判

大内記局

未刻藤宰相へ罷向、人數予、四辻、甘露寺、亭主、庭田相公羽林、正親町、烏丸辨、飛鳥井羽林、水無瀨羽林、廣橋、右佐、極藏等也、濟々儀、中酒凝候了、次臺所へ罷向改衣冠了、○大祥寺殿へ爲御月待親王御方渡御、

仍各可祇候之由有之、先勸修寺へ各罷向、於彼亭入麵一盞有之、次御隣御寺へ各祇候、中山前大納言、勸修寺大納言、下官、源大納言、持明院中納言、四辻中納言、甘露寺中納言、藤宰相、源宰相中將、左大辨宰相、右宰相中將、新宰相中將、中院宰相中將、光宣朝臣、輝資朝臣、雅敦朝臣、長治朝臣、雅朝朝臣、兼勝、橘以繼、源元仲等也、臺物共吸物以下御酒及大飲、順之舞及度度、音曲有之、予腹痛之間夜半時分歸宅了、

廿四日、壬午、天晴、十二月節、大寒入、○平野神主來、神祇權大副轉任之事申沙汰賴入之由申、勸一盞了、

廿五日、癸未、天晴、○柳原一品月次法樂連歌可來之由有之間罷向、人數亭主、予、持明院、藤宰相、烏丸辨、廣橋、妙法院之大藏卿、西林、速水安藝守、同彦太郎等也、畫餅（堅立、豆）、鹿入、にて酒有之、次晚濱有之、申下刻終了、○自建仁寺光堂眞性院、光明院歲暮之御卷數、禁裏へ如例年可執進之由申送、此方へ眞性院一枚被送之、

廿六日、甲申、天晴、自今日十方暮、○大典侍殿、臺所、内侍所等へ罷向、無殊事、○大工新二郎來云々、魚板、つるへ、箸木等送之、○陰陽頭在綱從飛州一兩日上洛之由申、中折紙二束送之、

廿七日、乙酉、陰、十方、○勢州之三宅壽均來談、薰物黑方調合之樣令習之、○自廣橋下知到、則局務に下知了、

天正四年十二月廿四日　宣旨

參議藤原朝臣 永　第一上首之間、永字不可有之、失念歟、

宣任權中納言　　藏人左少辨藤原兼勝 奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、兼勝誠恐謹言、

十二月廿四日　　左少辨兼勝 奉

進上　山科大納言殿

奉入宣旨

參議藤原朝臣

宣任權中納言事

右宣旨、職事仰詞、内々奉入如件、

十二月廿四日　　權大納言（花押）

大外記　局

自伊與局綿頭巾新調給之、祝着了、則禮に罷向、御方御所、大典侍殿等へ參、安樂光院歳末之禮に被來、卷數一枚、（○以下缺文）

廿八日、丙戌、天晴、十方、○五條之袍新調出來之間持遣之、○清和院良椿歳末禮に來、卷數茶一器携之、○通玄寺殿へ御歳末之御禮に參、餅御茶賜之、次村井長門守所へ罷向、次安禪寺殿へ參、入江殿に御座云々、次安三位所へ罷向、所望（○勞カ）散々式、事外煩敷爲體也、次慈受院殿へ參、昌御亮へ約束之黑豆遣之、御酒有之、次近衛殿へ參、御見參、次御亮殿申置之、次入江殿へ參、御盃賜之、松尾社禰宜相賴來云々、對梅宮社家申分有之、可申調之由有之、荒卷鮎鮒可携之云々、南都春日社御師積藏院之中時家上洛、黃昏來、卷數黑粉一袋、携送之、左督に同兩種送之、對面令飲盞、明日朝飡に可來之由約束了、

廿九日、丁亥、天晴、十方、○中朝飡に來、南都之雜談了、自實相院卷數被送之、葉室被出京了、○昨晚自廣橋下知到來、如此、則下知了、

天正四年十二月十三日　宣旨

從四位上藤原公宣朝臣

宜敍正四位下

從五位上藤原充房

宜敍正五位下

藏人左少辨藤原兼勝奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

十二月十三日　左少辨兼勝奉

進上　山科大納言殿

宣旨

從四位上藤原公宣朝臣

宜敍正四位下

從五位上藤原充房

宜敍正五位下事

右宣旨、早可被下知之狀如件、

天正四年十二月十三日　權大納言判

大內記　局

葉室下知、冷泉四品則下知了、

天正四年十二月廿六日　宣旨

正五位下藤原爲滿

宜敍從四位下

藏人右少辨藤原長敎奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

十二月廿六日　右少辨長敎奉

進上　山科大納言殿

宣旨

正五位下藤原爲滿

宜敍從四位下事

右宣旨、可被下知之狀如件、

天正四年十二月廿六日　權大納言判

大內記　局

小川善太夫御小本結絲共、并德大寺之袍織出持來、同與六山李二束持來了、○自烏丸頭辨下知到來、歳暮之禮に中山父子、庭田父子、竹田伊與守等云々、

卅日、戊子、天晴、十方、○局務に今日下知共沙汰之、如此、

天正四年十二月廿八日　宣旨

參議右近中將源朝臣

參議左大辨藤原朝臣

已上宣任權中納言

從三位藤原朝臣爲

宣任侍從

藏人（○頭脫カ）右大辨藤原光宣奉

口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、

十二月廿八日　右大辨光宣奉

進上　山科大納言殿

宣旨

參議右近中將源朝臣

參議左大辨藤原朝臣

已上宣任權中納言
從三位藤原朝臣爲
宜任侍從事
右宣旨、、、、、、、
天正四年十二月廿八日　權大納言判
大外記局
天正四年十二月廿九日　宣旨
神祇少副卜部兼興朝臣
宜轉任神祇權大副
兵部少輔中臣祐久
宜轉任兵部大輔
藏人右少辨藤原長敎奉
口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、長敎誠恐謹言、
十二月廿九日　右少辨長敎奉
進上　山科大納言殿
宣旨

神祇少副卜部兼興朝臣
宜轉任神祇權大副
兵部少輔中臣祐久
宜轉任兵部大輔事
右宣旨、可被下知之狀如件、
天正四年十二月廿九日　權大納言判
大外記局
勸修寺亞相、同新中納言、竹內兵衞督、源藏人等禮に來儀、○又下知共到來、
天正四年十二月卅日　宣旨
正三位藤原朝臣淳
宜敍從二位
藏人(頭脫カ)左中辨藤原輝資奉
天正四、、、、、、　宣旨
從三位藤原朝臣經
宜爲左近衞權中將如元
藏人頭左中辨藤原輝資奉

天正四、、、、、、　宣旨
正四位下源爲仲朝臣
同　藤原經賴朝臣
以上宣敍從三位
藏人頭左中辨藤原輝資奉
口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、
十二月卅日　左中辨輝資奉
進上　山科大納言殿
口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、
十二月卅日　左中辨輝資奉
進上　山科大納言殿
口宣一紙獻上之、早可令下知給之狀如件、
十二月卅日　左中辨輝資奉
進上　山科大納言殿
宣旨
正三位藤原朝臣淳
宜敍從二位事

右宣旨、可被下知之狀如件、
天正四年十二月卅日　權大納言判
大內記局
宣旨
從三位藤原朝臣經
宜爲左近衞權中將如元事
右宣旨、可被下知之狀如件、
天正四年十二月卅日　權大納言判
大外記局
宣旨
正四位下源爲仲朝臣
同　藤原經賴朝臣
以上宣敍從三位事
右宣旨、可被下知之狀如件、
天正四年十二月卅日　權大納言判
大內記局
黃昏御歲末之御禮參內、左督同道、御兩所之御小本結

持參進上之、幷眞性院、光明院卷數令披露、如例年於御三間御對面、中山前大納言、下官、源大納言、持明院中納言、四辻中納言、甘露寺中納言、左衛門督、源宰相中將、左大辨宰相、右宰相中將、新宰相中將、通勝朝臣、雅朝朝臣、爲仲朝臣、兼勝、範國、充房、橘以繼、源元仲等也、次親王御方へ同御禮申之、次御局々不殘申入候了、

言繼卿記　卅四

詠草

○永正十八年正月

正月十五日、是の會初、

鶯知萬春

行すゑのためしになれと萬代の春なつけくる鶯のこゑ

同當座、

柳辨春

よものそらは春ともわかぬ色なるにみどりことなるあなやきの絲

正月十九日、禁御會初、

鶴伴仙齡

君にとや先ゆつるらん仙人にたちそふ鶴のおなしよはひな

二月二日、伏見殿御會初、（◎歟缺）

二月十五日、是の月次會、

春霜

春なから草◎葉脫カの色ほそのまゝに空さえかへる野へのあさ霜

江柳

あさ日さすわか江の水もうちかすみ風の長閑になひく青柳

眼戀

おもはれぬ身こそつらけれかくまてになさかは人のいとひはつらん

同當座、

夏朝

あさ風の音もしつかに露ちりて見るに涼しき池のはちす葉

秋夜

なかき夜のね覺かちなる床の上にちかくきゝなすしきの羽かき

於嘉明院當座、（二月廿日、）

寄露花

ささそふや軒はの花のあさ露にうちしめる香もあかぬ袖かな

二月廿一日、中山春日法樂、

鶯

中るりの水に鶯のあな羽の影見えてふちにあらぬもふかき山川

二月廿四日、禁裏月次御會、

春曙

なちこちの山もほのかに春めきてよこ雲かすむあけほのゝ空

尋花

はる〳〵とたつれ入つゝいまそはやるくも花なる峰のしら雲

初戀

いつかさて心の色をあらはしておもひ◎脫カをそむる人にしらせん

永正十八二廿五、是に張行、

神祇

むかしにもたちかへりつゝ國民もおさまれる代を神やまもらん

同三月、月次是の會、

花滿山

たちなひくかすみも雲もひとつ色に花さきつゝく山のおちこち

同四月十五日、是の月次會、

新樹朝風

夏木たちなひく檜に雨すきてあさ露はらふかせかよふなり

獨聞郭公

ほとゝきすよその空にもなきぬらんわれにはひとり一こゑはおし

見出增戀

なさけあるそのたまつさを見てよりそ猶おもひそふ中となりぬる

田雲雀

雨すくる田面の水に影見えて雲になきたつ夕ひはりかな

名所關

あふさかやすきのむらたち木ふかくて關のし◎みつのかけくもるらん　脫カ

同月廿四日、禁御月次、

叢間螢

暮わたり野への草葉になく露のひかりをそへてとふほたるかな

欲絶戀

うつり行人の心はあさはかに見るかうちにもうとくなるらん

於禁裏御當座、

水鷄何方

そことなくたゝく水鷄はさしもせぬ眞木の戸くちをしらてすくらん

寄雲戀

わかおもひうはの空行雲なれやしのふなみたの雨とふりぬる

同五月、是月次會、

早苗

こん秋をいかて心もしられつゝひまなく見えて◎さ脫カる早なへかな

梅雨

雲とちてはれまもわかぬ五月雨におちこそまされ軒の玉水

往事

そのむかしなをこそしのへうつり行昨日もけふも夢とおもへは

同當座、

螢知夜

草のほら露ほのかにもくるゝ夜にひかりをそへてとふほたるかな

寄海戀

うなはらや物おもふ身のたくひそと見るめもからぬ舟をこそ見れ

永正十八三廿四、禁月次御會、

藤爲松花

松の春花もありけりとはかりに藤さきかゝる今をこそみれ

三月盡夜

あけはそのかすみし空も夏ならん春はこよひをなこりとやせん

江雨鷺飛

水かけもにこる入江の雨の日に荻毛しほれて鷺そ飛行

同五廿四、禁御月次、

春草

雨すきてかすみ露けき野への色やみとりそひ行春のわか草

夏夜

涼しさをまちとる程のよひ◎の脫カまにおほえす夏の夜はふけにける

永正十八六十五、是の月次、

螢

くれ行はたく露しけき草の葉に螢とひかふかすそまかはぬ

蓮

にこりにもしまぬ物にて色々もすゝしくみゆる池のはちすは

戀

したひぬる人の心のすゑかけて忍ふに遠き戀の道かな

同當座、

夏山

しけ◎り脫カそふ木のしたかけを行々もあつさわするゝ山のかけ道

夏舟

たきすつるう舟のかゝりかけきえて河◎も脫カほのかにあけわたる空

同永正十八六十四、禁御月次、

水鶏何方

行かへり所さためぬ水鶏にていまたゝくかたもさたかにはなし

紅葉一樹

たつれても又たくひなく紅葉するこの一もとはいつしくれけん

永正十八七夕、禁、

名所七夕

かた野なる天の河にもとはまほしけふ七夕の逢世ありやと

永正十八七十五會、延引にて同廿二日、

新秋雨

いつしかに草葉の露もをきそひてけさはつ秋のむら雨の空

野亭夕荻

野への庵とふ人もなき夕暮に風をとつるゝ軒の下荻

秋述懷

何かさて人なみならむましほりてうき身もおなし月はみれとも

蟲聲近

あさちふやわきてさひしくふくる夜の枕にちかき蟲のこゑ〳〵

潤槙

眞木たてる谷の下みちたえ〳〵におく物ふかく暮る色かな

永正十八七月廿四日、禁御月次、

初秋荻

まかきよりかつほのめきて秋きぬ□◎とをとつれそむる荻の上風

外山鹿

あはれをもよそにしれとやさをしかの暮る外山に出てなくらん

寄玉戀

袖にあまり涙の玉のかす〳〵にくたくはかりのわか心かな

なみた

つゝみてもかひこそなけれともすれはもろきな◎みた脫カの袖にあまりて

寄月招客

つけやりて月も夜よしとまつ人をまれく尾花にまかせぬるかな

大永元八廿四、禁月次御會、

初鴈

山とをく霧たちまよふたえまよりこゑめつらしくかり◎は脫カきにけり

翫月

すみのほる空もこゝそと床のうへ袖にやとして月をみるかな

野旅

はる〳〵とけふも行野の旅衣くれなは草や枕ならまし

永正十八八十五、是の月次會、

十五夜

あまつ空名たかき秋のけふさいへはあらぬ光や月にそふらん

同當座、

月前風

吹風に雲きりもなくはるゝ夜の月にはおもふこゝろもこして

寄月旅

行暮てしらぬ野山の月をみていとゝ都の秋そこひしき

永正十八八十四日、藤兵所當座、

月下鹿

ひろき野の月もさやけくふくる夜にあはれもよほすさをしかのこゑ

○大永元、禁重陽、

籬菊新綻

さかきにも露のひかりの色そへてけふさきそむる白きくの花

大永元、九十五是の會、

菊花色々

さきまさる庭の籬の菊のはな色香をそへておけるしら露

秋時雨

秋かたやみ山しくれて木すゑよりかつそめいたすもみちをそみん

眺望日暮

なかめやる波ちのすゑも暮わたりこきこそかへれ仲◎沖のカつり舟

同當座、

はなすゝき

すさましくかせこそわたれはなすゝきいとゝみたるゝ野への夕露

れ　うちもれす

れにたてゝむしのうらみにうちもれす物おもふ夜中のかたしきの袖

大永元九廿四、禁月次御會、

紅葉色々

たちましる山の楢のさま〳〵にそむるしくれの色は見えけり

鐘聲送秋

入あひのかれのひゝきもくれはつる秋ないつくにさそひ行らん

寄霜戀

いたつらにこふるしるしのみをつくし身をつくしてもかひやなからん

大永元十十五、是の月次會、

木枯

はけしくや峰の木からしふきぬらん落葉なかるゝ谷川の水

井氷

あさまたきくみてとる手のしつくまてこほりてさむき山の井の水

聞戀

かりそめに名にきゝてたにゆくゑなきうはの空にも物おふもかな

同當座、

千鳥

風さゆる浦わのなみのよせかへりちりかふ雪に千とりなくこゑ

逢戀

つくしつるこゝろをさらになくさめて今夜はあらぬ新まくらかな

於禁裏御當座、

暮春雨

けふはほやかれ行春のわか草のそてのなみたも雨にまきれつ

泊千鳥

ふる舟もこゝをさまりのなみのうへになれもたひなるとも千とりなく

冬增戀

うつみ火のいけるかひなきひとりねになみたのこほりむすほゝれつゝ

廿四、月次御會、禁、

橋落葉

あさしもはまたふむ人の跡もなしおちはをわたす谷のかけはし

杜雪

神かきもしらゆふかくる色なれやもりの◎こ脱カすゑはけさのはつ雪

大永元十十九、於禁裏御當座、

澤若菜

うちとくる氷のひまをもとめてや澤へのね◎せ脱カりけふはつむらん

擣衣

なかき夜のいとゝねられぬさむしろにいつくの里もころもうつなり

歲暮近

暮わたるかれのひゝきにおとろきぬおもへはちかきさとしのなこりに

大永元十一四、於禁裏御當座、

澤邊螢

澤水にほしのひかりのかけそへてかすもあまたにとふほたるかな

草花盛

かはかりの千種の花のさかりなるもみちの山に又やみてまし

霧中鳴

きりまよふ野は遠こちもわかれぬに音はかりなるしきのはねかき

野寒草

あさな〳〵草葉の色は冬かれて霜の花さく野へのさむけさ

同十一九、於兵衛督所當座、

爐邊閑談

霜ゆきの夜半ともしらすかたるにはさむさおほえぬうつみ火のもと

依恋稀戀

さにかくに人めをしのふ我中はいひはさんもたよりまれなり

同十一十五、是の月次會、

逐日雪深（◎歌缺）

禁中神樂（◎歌缺）

松陰浮水（◎歌缺）

同當座、

なくはつ霜を

なかのへの小さゝかはらに風さえてなくはつ霜をさむくこそみれ

ふるさと人の

山かけはおりもかはらぬさひしさにふるさと人のなをそゆかしき

同十一十七、禁裏於御當座、

歸鴈知春

さく花◎の脱カ水すゑもまたて春といへはをりたかへすもかりかへる空

擣衣響風

うちすさむ程こそなけれ秋さむき風に音そふ夜半のさ衣

旅夢

ひきむすふ草のいほりのかり枕夢さへうときかたしきの袖

靜永元十二十五日、是の月次會、

向爐火

さむき夜はれられぬまゝに向ゐて又かきおこすうつみ火のもと

市歲暮

いまはほや年の暮そと市人の所せきまてさはくこゑ〳〵

祈久戀

いつかさて神にいのりし末さけて人の心のなひくをも見ん

同當座、

冬野

冬かれの色もさむけく吹風に雪うちちれる野への夕暮

大永元十二廿四、禁裏御月次、

居所

中かこひすてゝ見えすく程の中垣に心へたてぬこゝろをそしる

獸

中杣山のおくにはゆかしうつほ木にあら熊のふす事もこそあれ

○大永二年正月

大永二正十五、是の月次會初、

子日祝言

二葉なる子日の小松ひきうへて君か千年の春をかそへむ

同當座、

早春山

雪なから山は霞のたなひきて今朝はゝ春のかせの長閑けさ

關路雲

あふさかや關路をこゆる行末も跡もへたつな雲の村たち

大永二正廿三、禁裏御會初、

梅近聞鶯

軒ちかく梅のにほひにさそはれてこゝになれぬる鶯の聲

大永二二十五、是の月次會、

餘寒嵐

春さいへとあらしの音のさえかへりつもるともなきあは雪そふる

故郷梅

ふるさとのあれまを脱カさり行軒はにもあるしとなりて梅匂ふらん

變約戀

たかへしさいひし言の葉いかならし昨日にかはるけふの音つれ

同當座、

郭春曙

かすみそむる都の山の色よりものさかにみゆる春のあけほの

遠村煙

なかめやるしるへも遠く臭竹のけふりたなひく里の一むら

大永二二廿四、禁裏月次御會、

野殘雪

中　若なつむ人はまたこぬ雪の上にたつはかすみのさむき野のすゑ

柳靡風

中　音はせぬ水のみさりも青柳もきしによりくる河かせそふく

淺始戀

中　こゝろしてつたへそめよと中たちにまつ一ふての文をこそやれ

大永二三十五、是の月次會、

深夜歸鴈

ふくる夜のれ覺の空になきすてゝ春のなこりさかへるかりかね

見花戀友

かくはかりさかりさしらは見る花にさそひくへきを春の友さち

湖水眺望

かゝみ山むかひこそ見れ水海の波路はるかにつゝくうら〳〵

同當座、

夕花

さかりなる色香にめてゝあかなくもくるゝをしたふ花の木の本

惜花

けふはいや見るかうちにもちる花をいたくなふきそ春の山風

大永二三廿四、禁裏月次御會、

庭上落花

中　跡つけてふまゝくおしく庭の面に雪とみえつゝ花そちりしく

留春不駐

中　しらすなをうはの空にもしたふ哉さまらぬ春の行衛いつくと

山家待人

中　あらしふく山下庭のさひしさをなくさめかれて友そまたるゝ

大永二四十五、是の月次會、

更衣

かさねぬる花の色香の袖もけふひとへになれる夏衣かな

山葵

中　まつるてふその神山◎のあふひ草かはらぬ物とたるやもろ人

脱カ

遠戀

あさ夕にわかわすれすも戀しさはおもひやるにも遠き海山

同當座、

尋郭公

なきぬへき里にもきかす郭公いつくの山か又たつねみん

杜夏草

しけりそふ杜の下道日はくれて草葉にをける露そ涼しき

寄風戀

おもひれの枕にみつる夢をたに又おとろかす軒の松かせ

大永二四廿四、禁裏月次御會、

路卯花

きえのこる雪やはあらん山さとのみちのかきれの卯の花の色

郭公一聲

雨すくる雲ゐのよそに一こゑをもらしそめぬる郭公かな

夏夜戀

おもひわひかたしく袖の夢をたに見る程もなきみしか夜の空

大永二五十五、是の月次會、

菊蔕蒲

ぬま水におふるあやめを五月きてかる人しけき袖にほふなり

夕郭公

いく度もおちかへりなけ郭公わきてまたるゝ夕暮の空

古寺燈

立ならふ松よりおくに寺見えてかけもしつかにのこるともし火

同當座、

夕立風

きほひくる雲さそひ行風はやみよそになりぬる夕立の空

市商客

しりしらす所せきまてましはりの物いふしなもかはる市人

大永二五、神護寺當座、

雲間郭公

たか里の聲の名殘りそ雲間よりもりてほのかに鳴ほとゝきす

大永二五十九、盛秋興行、法樂、

雉

うちかすむ野は若草のそこなく子をおもひてやきゝすなくらん

雪

雪にけさそさもの檜うつもれてこゝにまちかくむかふ山のは

大永二五廿四、禁御月次會、

早苗

雨まちていつくの小田もをしなへて袖も露けく早苗とるなり

新戀

さりともと心をかくる御しめ繩おもふ筋をは神もしるらん

大永二六十五、是の月次會、

なこしのはらへ

夏はつるけふはなこしのはらへしのかへる河せの跡や秋かせ

おも影

見し夢のその面影をしたひてもさめてかひなきうたゝねの床

同當座、

夏風

あつさをもわするゝはかり吹かせにやすらふ水陰夏の日もなし

秋山

さそな猶深き山路の草も木もしくれて秋の色をみすらん

大永二六廿四、禁月次御會、

夏

大江山

見るか中に雲を涼しく大江山ふもとはるゝ夕立の雨

戀　石淵杜

中　忍ひてもなをいかならんあた人のあたにいはせのもりてきこえは

大永二七夕、禁裏、

星夕言志

中　おろかなる我言の葉も織女のけふの手酬にきこえ明けり

大永二七十五、是の月次會、

七夕

たなはたはとしに一夜さなけゝともくる秋ごとの契りたえせし

菴露

あれまさる草の庵は秋になををく露しけき暮そさひしき

樵夫

朝夕にかよひなれても山人の柴とりかへる坂やくるしき

同當座、

稻妻

夕やみの月待わふる山のほの雲にほのめく稻妻の影

神祇

すなほなる神は時世をたかへすも祈しるしを猶やみすらん

大永二七廿四、禁月次御會、

初秋朝

中　をのつからおもひなしにや秋きぬと昨日にもにぬ今朝の空哉

行路萩

中　袖かはす往來の野への眞萩原色こくおしき露そこほるゝ

鹽屋煙

中　いつもたゝくもりがちにそけふりぬるつゝく鹽屋のつゝく遠かた

大永二八五、於石川所當座、

海未出穗

昨日けふ秋とはかりにほのめきて露をふくめる庭の小薄

旅秋夕

野を行も山をこゆるも袖ぬれてうき事まさる秋の夕暮

大永二八十五、是の月次會、

夢後鴈

夢さめてあけやらぬ夜の手枕にまちかくわたる初鴈の聲

獨對月

露すかる淺茅か末に月をみてひとり心のすめる夜半かな

顯悔戀

しのびはてぬ心あさゝに今は身のうき名にたちてくゆるかひなさ

同當座、

橋上月

白妙の光もみえて夜もすから月すみ渡るかさゝきのはし

寄月眺望

なかめやる千里のほかも曇なく今夜名たかくてらす月かけ

同十五、於親王御方御當座、

月前萩

月影は雲ものこらぬ秋かせに光うつろふ露の萩はら

舟中月

舟さむる波を枕の夢さめてさまやもりくる月のさやけさ

月前雲

山のはを出てもしはしうき雲のたえまをそ思月の中空

寄月契戀

かれの音も身にしみかへる思哉月に契りてふくる夜の空

寄月神祇

月かけに猶白妙のしめはへて心もきよき水かきのうち

大永二八廿四、禁月次御會、

露滋草花

色々の野への千種の花の上にをきあまりぬる露そみたるゝ

橋邊鴈

いつく宿せたのなかはし末かけてむかひに渡る天津鴈かれ

大永二九七、石河南宮法樂、

籬翠參

雨すくる庭の籬に打なひき露をもけなるなてしこの花

寄草戀

いまはとやしのふの草の色に出て人をもしらん袖そしくるゝ

大永二九九、禁御會、

菊花臨水

秋ごとにさきそふ菊の花の色に千代もたかふや庭の池水

同日、是にて會、

菊花臨水

池水にさきおほひぬる白菊やかはらぬ秋の色をみすらん

大永二九十五、是の月次會、

秋　龍田山

たつた山入日の色もそめそへてよそよりふかき木々の紅葉々

秋　生田池

しくれして生田の池のいく度もはれてはくもる水の月かけ

雜　會坂關

たひたちて往來の人にあふ坂の關もさゝゝて明わたる空

同當座、

淺茅露

秋風のあとはすゝろに露ちりてみたれあひたる野への淺茅生

立名戀

しのひてもおもひのあまりいかにせんなき名に立も涙ゆへかは

遠村竹

里見えて山もさ遠き夕けふりなひくもしるき竹の一村

大永二九廿四、禁月次御會、

蟬

中　さたかにはきゝくこゑわかれ立ならふ檜あまたの蟬のもろ聲

怨戀

中　いはすともよそにいさとはれうらみあるこゝろのそこはうへにみゆらし

大永二十十五、是の月次會、

落葉隨風

霜のをく今朝よりも猶夕風の木の葉をさそふ音そさやけき

披書恨戀

玉つさのおろかさみれは今さらにうらみかすそふ袖そしくるゝ

大永二十十五夜、禁御當座、

三月盡

花もはやさそひつくして吹風にあとなき雲と春そ暮行
夏月
かたしきて夢見る程もみしか夜のあけ行月そ袖にきえぬる
橘上霜
さえ渡る朝の霜に柴人の跡つけそむる谷のかけはし
寄草戀
おもひゆへ軒のしのふもわか袖も涙の玉の露やちるらん
古寺瀧
松すきのたかき岩まに瀧おちて心もすめる嶺のふる寺
大永二十廿四、禁御月次會、
池菖蒲
池水のあやめの末葉ふく風にからぬ袖さへまつ匂ひけり
向爐火
霜やなく閨のうちまて寒き夜もわするゝはかり向うつみ火
大永二十一月一日、於綾小路亭法樂、
草花
中ろ
うたかくあかりて遠き野の末の千種の花もみわたしてけり
山家
け
けふりたつこの山もとのかけふかくおくもしつけき家々の道
大永二十一十五、是の月次會、
鶏擣霜
夜もすから擣もさむけしはらひえぬ霜をかさぬる鶏の毛衣
山家冬朝
山さとのたのむかけひの水もけさこほりやすらん軒の松風
寄枕雜
幾夜半かみしかき夢をおしむらん草の枕にあらぬかりねも
同當座、
岡朝雪
かた岡の松一むらも雪に今朝うつもれはてゝ嵐たになし
雪似花
庭のおも春ならねともめつらしく草木花さく雪の色哉
大永二十一廿四、禁月次御會、
夏草
しけりあふ庭の夏草むら〳〵に花と見よとや露のなくらん
寄蟲戀
我おもひなくさめかたき夕暮にあはれなそへそむしの聲々
大永二十二十五、是の月次會、
雪中望
なかめやる千里のほかも雲はれて雪にまちかくみゆる山々
除夜雪
年月のかきりもこよひ降つもる雪ふかくとも春やこえなん
戀手向
あひみんと神に手向のゆふかつらかけてしるしな猶いのる哉
同當座、
夕霞
夕あらし板屋の軒にさえ〳〵てあられ玉ちる音のはけしさ
關鶏

かりまくら鳥のそられに程もなくはやおき出るあふさかの關
大永二十二十七、禁春日御法樂、
故郷橘
むかしなをしのはれにけりふるさとの花橘のうちかほるにも
寄鳥戀
新まくらかたるかうちに程もなくわかれもよほす鳥の音はうし
大永二十二廿四、禁月次御會、
夏月
やすらひて風を待とる宵の間にほのめき出る月の涼しさ
寄露戀
しのひてもおもひあまれる袖の上にまつをきそむる露いかにせん
○大永三年正月日
大永三正十三、是の月次會初、
松有春色
うへをきし松は代々ふる陰なから春一しほのみとりそふ色
同當座、
路若柴
道のへや雪まもとめて行々もまた色わかぬ若なをそつむ
寄民祝
天照日影も春に長閑にて民の往來もやすき比かな
大永三正廿四、禁御會初、
松添榮色
つきせしな庭の松か枝いやましにみとり色そふ千とせいく春
大永三正十七、廣橋會初、
梅花久薰
いく春もなれてそみまし此宿に色香そひぬる軒の梅かえ
大永三二十五、是の月次當座、
春野遊
長閑なる野に立出てすみれつみつゝしつむ日こそなかけれ
早蕨未遲
もえ出るそれとはかりにもとめてもまたみしかきや峯の早わらひ
嶺林猿叫
峯たかき松の林のかけに來て夕さひしく猿さけふこゑ
大永三二十八、廣橋月次會、
春月
春といへはいつくの空もなしなへてかすみはてたる月の影哉
花下忘歸
あかなくも花に心をうつしてや家路わすれてくらす木の本
通書戀
我もおもひ人もへたてぬ心そとことはりしけくかはす玉章
同當座、
水邊柳
そこきよき水も緑に影みえて風をすかたの岸の青柳
餞春
春秋のへたてもいつらしたひてもかれをかきりに年そ暮行
大永三二廿四、禁月次御會、
野萩露
中ま萩はら花よりさきにいく度か風にちるらん野への夕露

寄門戀

中たゝすむを人のとかめは妹か門あくるを待さたゝにこたへん

大永三二廿六、禁御當座、

冬鐘

ふる雪に松の嵐は音たえて枕にちかき曉のかね

埋火

さゆる夜のれられぬまゝにおきぬつゝ又かきおこしむかふ埋火

大永三三十五、是の月次當座、

霞中花

たちそひし空はかすみの色なから花さき匂ふ三吉野の山

花參差

さかりそさまつみし山を分いれはをくには花のさかぬもそある

寄國祝

民までも道の道たる御世なれは國ゆたかなる時は此時

大永三三、

得辨才智顧

彼國にむまれて後やさま〳〵の佛の法も我そとかまし

大永三三十八、廣月次會、

鶴

日の影はまたくれやらぬ雲ゐにやあかるひはりの聲のはるけさ

藤

松か枝に千とせをかけて契らんいく春さきてにほふ藤なみ

旅

野山をは分つくしきてけふはまた見わたすかたに遠き海原

同當座、

夕春雨

さひしさはなくさめかたき柴の戸を雲にとちぬる春雨の暮

大永三三廿四、禁御月次會、

遙尋花

けふは猶雲もかすみも釉かはす山よりやまの花を尋ん

靜見花

風もなくのとけき空の夕はえはなをあかなくの花の色哉

寄花戀

あたになとおもひそめけん花よりもうつろひやすき人の心を

大永三閏三十八、廣月次會、

都暮春

行春をさゝめまくほし都人しるもしらぬも心あはせて

名立戀

よそに名はよしたつとてもせめてさは我おもふ人のゆへとおもはゝ

同當座、

春聲

かさなりし雲もかすみも分すてゝ都はるかにかりかへる聲

秋色

入日さす松の水の間に色みえて今を時なる山の紅葉や

大永三後三廿四、禁月次御會歌、

霧

八重一重立まよひぬる秋霧に見えこそわかれ遠近の山

寄河戀

つゝみても思にあまる涙川人めせくへきしからみもなし

大永三後三廿九、外樓よりさた御返之時御當座、

曉鹿

山もとの物しつかなるあかつきに涙もよほすさほしかの聲

懷舊

くれ竹の世々のむかしをきくにしも身のうきふしそけにたくひなき

大永三四二、於中御門亭、石河人丸法樂、

七夕

羅綺の袖けふを待えし七夕にかすは一夜のなさけならすや

大永三四十九、廣月次會、

朝更衣

なこりある花のたもとも今朝ははやひさへに春のうつり香もなし

名所卯花

夏までもきえぬ雪かと卯花にいまさらたとる小野のほそ道

神祇

もろ人の祈るしるしの數みえてしめかけそふる神の水かき

大永三四廿四、禁御月次御會三首、

卯花隈水

ふみ分し道こそ見えねしけりつゝ卯花ふかき賤かかきねは

郭公驚夢

一こゑにおとろかされて郭公夢より外に又そきゝぬる

瀧水亂絲

波にはそ絲そ亂る水の上にをるさはなしの布引の瀧

大永三五廿四、禁、

野萩露

わけ行は釉の色さへうつろひて露ときみたす野への萩はら

鶺鴒

山に◎となき霞の末に鳴すてゝ名殘今はとかへるかりかね

同五廿四、

寄衣戀

さ夜衣又かへしぬるおもひれの夢にもうとき人のおもかけ

大永三六廿四、禁、

螢過窓

あつめえぬ窓◎の脫カ螢のいたつらにみたれてよそにすくる程なき

夏草

しけりあふ草葉の露も色殊に物にまきれぬなてしこの花

同、

松風忘夏

あつさをもわすれてゆかん道すから風のなさのみつゝく松はら

同、

寄車戀

たえすのみおもふもはかな小車のめくりあふへきたよりたになし

寄戸戀

わかれても身を秋かせの松の戸に音つれもせぬ夕暮はうし

大永三六廿五、禁御連歌後御當座、

瀨夏祓

涼しさもいく瀨の涙にみたらしやはらぬけふそみそきしつらん

大永三七七、禁御會、

織女惜別
たなばたのあふ瀬うれしき袖の上にはやわかれ路をおもふ露けさ
大永三七七、是の張行、

七夕雲
待えぬるこよひ一夜ばくもりなく雲なへたてそほし合の空

七夕風
織女の天の河瀬に立波のよるへ涼しく秋風そふく

七夕露
まれ◎にきておもひそまさるたなばたの別おほかる袖のしら露

脱カ

七夕橋
いく秋かちきりかけん七夕のわたりたえせぬかさゝきのはし

七夕船
さしこさにあふ瀬かはらぬ天漢さそいそくらむ妻むかへ舟

七夕衣
けふはみなわれも〳〵とたなばたにかすやたちぬふ衣の色々

七夕枕
天河そはたてあへぬ岩まくらなこりのこしてあくる空かな
大永三七廿四、禁御月次、

初秋
雲の色かせの音またかはられと秋來にけりとおもひなす空

遇不逢戀
つらかりし其まゝにして一夜たにあはすは何をおもひてにせん
大永三八四、於少弼所當座、

秋夕風
なにとなく秋の夕はたゝならぬ物おもへとの風の音つれ

瀧紅葉
山はみな紅葉のにしきたりかけて日影にさらす瀧のしら絲

寄篷戀
うきをしれ篷ふく舟の波まして誰ゆへ袖の露よなみたよ
大永三八十四、於轉法輪會、

名所月
むかひ見る鏡◎の山の峰を出る影もくもらぬ秋の夜の月

カ

月前戀
かならすさいひしも今はそらだのめはや深過る月やかこたむ

寄月祝
天照月の光も君か代もおなし千年◎の秋はつきせし

脱カ

大永三八十五、禁御當座、

湖月
しかの浦や一水の松の色ならてくもるさもなき濁の月影

寄月切戀
この夕月にやさふと分てなをたちてみぬてみ待わふる空

寄月祝
見る度にかわらぬ月の光をはいく萬代の秋に契らん
大永三八廿四、禁月次御會、

水邊月
草ふかき澤邊の水もあらはれてかけすさましくすめる夜の月

野徑月
ひろき野のかきりもしらす行道にさはるかたなき露の月影

月前鐘
ふけ過る鐘をれ覺にきく夜半の月も心もすめる空かな
大永三八廿六、花山院勤進、

神刀品
中くもりなき月もあさ間わかさ路ののちせの山はまよはさらなん
大永三九六、於甘露寺亭當座、

月
おもひやる千里の外もいかならん夜もなか月の月はみるやと

菊
うへをきしたれやさゝ〳〵庭の面の菊はさかりの色をわけゝり
大永三九九、禁御會、

菊添佳色
ことしなを色香をそへて所からさくも九重霜のしらきく
大永三九十三、於禁御當座、

野月
ひろき野のかきりは雲のはてもなく秋風はらふ月のさやけさ

月前田
露しもの小田のかりほの稻むしろさし入月の影のさひしさ

寄月忍戀
影やさす涙の袖の月をたに人もやしるさしのふはかなさ
大永三九廿四日、禁月次御會、

萩
行かへりすそ野を分る袖の上や花にうつろふ露の萩はら

鶴
うら波のよるのしほ風はけしきに子をおもふ鶴のしけき聲ゆ
大永三十一廿四、禁月次御會、

濱五月雨
眞砂こそ底に成ぬれ濱川の水かさまされる五月雨の比

見戀
面影も中ゆつちき計にて見る度ことにおもひもそそふ
大永三十二廿四、禁月次御會、

夜寒重衾
さむさをもおほえぬ計かさねきて夜半の衾に冬を忘れつ

雪中歲暮
野も山もひとつにふかき雪の日に松うちはらひとしきをそきる

關路行客
いそくらしろもしらぬもあつさにと行つるゝ人にあふさかの關

○大永四年正月日
同十九、禁御會初、

水石歷幾年
君になをいつれ久しきためしならむ苔むす巖御池なる水
同二廿四、禁御月次御會、

野春雨
もえ出る野へのわか草露しけくなををきそひて春雨そふる

櫻柳交枝
枝かはす柳のみとり色はえて櫻そに〻き花を識ぬる

初逢戀
おもひあへぬ新手枕は涙にてつもるうらみもいはんひまなし

同三廿四、禁月次御會、

野夕夏草

しけりそふ夏野のすゑの夕露をわくるもすゝし草のむら〳〵

被厭暁戀

かすならてかこつもはかないとはるゝ身のうしとわれをうらみん

同四廿四、禁月次御會、

更衣春惜

花の香の春のたもとをしたへともけふはかならす衣かふらし

待聞郭公

まち〳〵しこの夕くれの時鳥はやくすき行一こゑはうし

風破旅夢

かちまくら舟のうきねの夢をたになみにとさそふ磯の松かせ

同五廿四、禁御月次、

夏暁月

よひのまの月はそのまゝ夏の夜の程なくあくるあかつきの空

杜夏草

しけりあふもり脱カの下草うちなびきかせふきみたす露の涼しさ

雨中戀

露なみたはらひかねたる雨の日はいとゝおもひの袖そしほるゝ

大永四六十三、於晩鐘軒花之後當座、

寄世祝

民までも道すなほにとおもふ世やたか心にもいのる神かき

大永四六廿、於姉小路當座、

蓮

あつさをもよそになしつゝ見るからに池のはちすの露の涼しさ

恨

うきにのみうつりもて行人の身にうらみの末ないかてはるけん

大永四六廿四、禁月次御會、

夏聲

あつき日にせみのこゑ〳〵涼しくもふらぬ雨きくもりの水かくれ

懸色

つゝみても袖の涙の色見えてよそにうき名やはやくたちなん

大永四六廿五、於禁御連歌後御當座、

閑庭橘

うちかほる物しつかなる夕風にひとり袖ふるゝ庭のたちはな

大永四七七、禁、

織女雲爲衣

中秋といへはいほはたたてゝ織女のをるもや雲の衣なるらん

大永四七廿四、禁月次御會、

翫秋花

秋の野に行かへりつゝあかなくも千種の花を手折もてきぬ

遙聞鹿

山かけは人もとひこぬ夕くれに鹿の聲さへさたかにもなし

古寺路

松しけき水かけにふかく道みえ　かれかすかなるみれの古寺

大永四八十五、於禁御當座、

月下女郎花

ふく露もうしろめたしや女郎花月にみすてゝかへる夜の空

禁中月

名にたかきうへはあらしな百敷に光てりそふ月のよなく

庭上月

風わたる庭のまさこの白妙にちりもくもらぬ月の影哉

寄月絶戀

わかれ路にさしもうかりし有明をたえはつる身にいとはてそみる

大永四八廿四、禁月次御會、

磯

しほのさす磯の岩かれ音たかくよせてはかへる波そひまなき

松

うへなきし軒はの松のさしなへて枝さしそふるかけそ木ふかき

大永四九九、禁御會、

菊獨秋花

中あかす見し千種の花の色も香もさかり久しき菊に殘れり

大永四九十三夜、禁御當座、

月前蟲

露さむき野もせの月の夜もすからたれをさへとか松むしの聲

島邊月

旅衣遠しまかけてこく舟のあとものこさためぬ月のさよかせ

大永四九廿四、禁月次御會、

名所擣衣

よな〳〵にたえすこそきけふくるまておきぬの里に衣うつこゑ

紅葉透松

峯たかみ松の木の間にほの見えて入日うつろふ初紅葉哉

度々返事

おもふそとかくはまことを幾度か爲のみといふ文はうし

大永四十九、於眞性院當座、

岡紅葉

夕日影しかカ◎くれの跡にほの見えてもみちしたてる岡のへの道

大永四十十、於石川所當座、

夜落葉

夢をさへむすはぬ床の夜あらしに又うちそよく落葉をそきく

大永四十廿、於姉小路當座、

雨中橘

いまさらにしらぬむかしもしのはれぬたち花かほる夕暮の雨

里黄葉

山もとの里一むらのはゝそはら立そふ木々にそめ分る色

大永四十廿四、禁月次御會、

田霜

もりすつるかりほもさひしけさはなを小田のいなくき霜のさむけさ

浦雪

はるかなる波路の末もくもりなく雪になきたる浦の朝明

大永四十一廿四、禁月次御會、

遠山雪

とをくみし高根ながらも朝戸出にまちかくなれる雪の山々

寒夜爐火

さえわたる霜夜の床のさむしろにむかふひまなき爐火の本

幽徑苔

山ふかみたかすむかたそたえ〳〵に末もつゝかめ苔のほそ道
大永四十一廿五、禁御當座、

雨中花

ふる雨の音もしつかにむかひゐてふかき色香や花の夕はえ

六月祓

みそきしてかへる夕の河なみにはやくや秋の風がよふらん

殘菊

かれ殘る色もさむけき霜の日に匂ひかはらぬ菊の一もと

久戀

つれなさのさしもつもれはわか袖の涙の川そふかさまされる
大永四十一卅、統秋朝臣百ケ日、孝秋勤進、

ひ

曙夢

中

日なへつゝあはれにそ思ふなてしこの秋はいかにさわふる心に
大永四十二廿二、於姉小路當座、

驟中時雨

こえて行山路は時雨いく度そしほれかちなる旅の衣手
大永四十二廿四、禁御月次御會、

古池菖蒲

水さふる池のふか草ましりあひてあやめもわかすしけりゐる哉

霰音破夢

れやのうへに霰玉ちる音さえて夢をもさます夜ゐのさむけさ
○大永五年正月日
大永五正廿四、禁御會始、

中

梅交松芳

契りきておなし千とせにほふらん軒はの松にれさす梅が枝
大永五正廿七、是の會始、

水石契久

苔のむす庭のいはほも池水もかはらぬ世々のかけをそふらん
同當座、

柳露

長閑なる霞の色もこもりつゝ露の玉ぬく青柳の絲
大永五二廿三、於富小路當座、

梅

風ふかぬ其間もさらに軒ちかき梅はまかはすうちかほりゐる
大永五二廿四、禁御月次御會、

夏草露

ふみわけて行へき道も夏ふかく露をきみたす野〳〵の草むら

寄忍草戀

人はなを軒のしのふの色に出てかれぬ思ひの身をいかにせん
大永五二廿七、是の當座、

春曉月

山のはの雲ははれても春の夜の月かけかすむ曉の空

橋上苔

かけふかき谷のほそ道たえ〳〵にふむあともなき苔の岩はし
大永五三廿四、禁御月次御會、

花落薫衣

中

なれ〳〵て花の香にしむ衣手はちりゐる後のかたみならまし

暮春殘花

中

たかためさ木陰によりてさはまほし花を殘して春そ暮ゆく

春夜戀

中

あかす思ふ人ゆへ春のみしか夜もことゝ程なくあくる手枕
大永五三廿九、禁御當座、

暮春雲

いつくをか春のさまりさ尋ましし雲もかすみも暮て行空

近戀

おもひそめし涙の袖もみなかちによそけに人そしらすかほなる
大永五四七、於柳原當座、

早苗

ふる雨の晴間もまたす小山田にたこのをりはへさる早苗哉
大永五四十七、是會當座、

廬橘近砌

軒ちかき花たちはなの匂ひにそむかしの人もさらにゆかしき

樵夫

たえすわかわさしなから山ふかき道わけわふる木こりなるらん
大永五四廿四、禁御月次、

月

さはるへき雲も殘らす秋風を千里の月の光にそ見る

後朝戀

面影は猶忘られす身にそへて今朝はおきうき床のうへかな
同六月廿五、公宴御連歌後御當座、

春日野

のとかなる日影まち久て春日野は雪間よりまつ若菜をそつむ
○大永六年
三月一、於禁御當座、

都花

名にしおふ都の花やをしなへて四方の檜のさかりみすらん

花忘老

ふく風もなくてえならす盛なり花にや老の春をわすれん
同廿九日、四辻勸進、故亞相三廻、

つ

囉累品

つとめても猶もたもたん三度までさつけをきてし法のことはり
○大永七年
六月九日、公宴御代始御會、

竹不改色

生そひて葉かへぬ竹の色もなを君か千世をや契りをくらん
同廿三日、四辻勸進、

え

鹿聲近

えならすよ萩さく野への夕暮に外山もちかきさを鹿の聲
同廿四日、於柳原亭當座、

納涼

しけり行木々の下かけ風立てあつさしられぬ道のやすらひ
同七夕公宴、

織女契久

年をへてたえぬ契りや織女のあふ瀬うれしき天の川波
同廿四日、公宴御月次、

待郭公

鳴ぬへきおりな過しそほと〻きすこの夕くれのむら雨の空

朝霜

草も木も色なくみゆる冬枯にをくもさむけき庭のあさ霜

寄鳥戀

待よはるうたゝねなから明る夜にたか別路の鳥はなくらん

八月十五日、於墨亭當座、内藏頭張行、

岡上月

淺茅生のかけさひしくも月深て露もほのかに岡のへのやと

寄月增戀

荻の葉に風をとつるゝこよひしも月にやいとゝおもひそふらん

同廿五日、公宴御月次、

初聞鴈

秋霧のふかき山路やこえつらむけさめつらしき初かりの聲

花落月

四方に晴て都は山もとをけれはさはる雲なくすめる夜の月

寄絲戀

いかにせむあふ事はなをかたいとのうきふししけき戀のみたれを

同廿九日、於墨亭當座、

初鴈

秋かせに霧のたえ間はありなからすかたもわかぬ初鴈の聲

九月三日、於墨亭當座、物書會、

嶺紅葉

峰たかみ木々の梢の色わきて入日にみゆるはつもみちかな

同十日、賀州白山長東張行、

首夏

花鳥もれに歸りつゝけさはほや春もよそなる杜の下かせ

田家雨

しつかすむ門田のいなはかせ過てむら雨そゝく音のさひしさ

同十三日、於四條亭當座、物書會、

漸傾月

なかき夜も雲吹はらふ風のまにしに成ゆく月のさやけさ

月前竹風

くれ竹の葉にたく露のしら玉に光こそなる秋の夜の月

同十八日、於柳原當座、物書會、

秋田

たく露に秋のほなみの打なひき色つき渡る小田のむら〳〵

同廿三日、於官務亭當座、物書會、

鶉

露しけくをのの秋萩うつろひて夕くれふかく鶉なくなり

同廿五日、公宴御月次、

藤

松の葉の色さへみえすさきそひてなかきしなひの藤そかゝれる

霧

おほろ夜の影かさそみる立のほる霧のうちなる月のひかりは

山家

おくふかきこの山すみもある物をさふ人なくはいかてしらまし

同廿八日、於墨亭當座、物書會、

秋山

山のはほしくれ〳〵て昨日けふ色みえそむる木々の紅葉々

秋船

行末はなをやたとらんあさ霧に舟こきまよふ波のうへかな

同十月三日、於墨亭當座、

津千鳥

雜波津のあしのかれ葉に風さえて友よふ千鳥聲さはく也

同八日、當座、物書會、

寒草霜

けさはなを庭もそともも冬かれの草葉の霜の色のさむけさ

隣里鶏

へたてなき里のしろへのあかつきもなれて枕の鳥のこゑ〳〵

十一月八日、當座、物書會、

殘菊

霜かれの草葉のなかにめつらしくさきてそ殘る庭のしら菊

同十三日、當座、於墨亭物書會、

松響

白妙にうつもれはてゝ雪にけさ風もこゑなき軒の松かえ

同十八日、物書會當座、

窟前螢

あつめをく窟の螢もほの〳〵とあけ行空に影そきえ行

同廿三日、物書會、於四條亭、

野外鹿

さひしくも野へのかよひ路暮初てつまとふ鹿の聲のはるけさ

山家夕

山里は夕のあらしさえ〳〵てふかくもつもる峰の雪哉

同廿五日、公宴御月次、

落葉

水からしの音もはけしくさえ〳〵て時雨ときくや落葉なるらん

千鳥

雪ちりてあしの葉そよく浦かせに友よふ千とり聲のさむけさ

海路

海はらやこき行舟のはる〳〵とみわたす末は山のはもなし

○大永八年（享祿元）

正十九、公宴御會始、

梅花久薫

君か代に色香つきせぬ梅のはなをいく春のかさしとかみん

二月廿四日、公宴御月次、

路藤

むらさきの花のゆかりに立そよる道の行てにさける藤かえ

初冬

かせにちる山の紅葉のからにしきけさより冬や立はしむらん

久戀

はつかにもあひみし事は久堅の雲路へたてゝ物をこそ思へ

言繼卿記別記

○天文二年十二月廿四日、親王御方御元服御童裝束

御目六

一御直衣　一御あこめ
一御ひとへ　一御さしぬき
一御下のはかま　一御ひあふき
一御すゝしのはかま　一御こしつき
一御こもとゆひ　一御からひつ三色被略ゝ御からひつ古物
被出候、ちいさく候て不入候間、御服御唐櫃入進之、遂而可新調、

以上

此御もく六去月進之、總用前々分注進申候處、當今御元服之時のことくと被仰出候、其時之儀一向折中法外之事也、雖然其分可申付者也、

○天文二年十一月二日、庚子、昨日早旦御服之事、何樣にも如此先可申付之由被仰候、今日又可參之由候間則參候處、御服之事堅被仰出候、則井上召寄、如先申付候、何も畏候由申候、其内御指貫之事被迷惑之由申候へ共、種々加問答申付候、公方へ申入候分、

一御なをし、御たけ六丈八尺、百七十きれ、十一貫八百八十文、御うらきぬ二疋、二貫六百、御てうれう百十疋、御色付五十疋、都合十六貫八十文也、

一御あこめ、御たけ四丈二尺、二百きれ、八貫四百文、御うらきぬ一疋、一貫三百、御てうれう百疋、御色付五十疋、都合十一貫二百文也、

一御ひとへ、御たけ四丈二尺、百十きれ、四貫六百廿文、御てうれう百疋、御色付二百疋、都合七貫六百廿文也、

一御さしぬき、御たけ三丈六尺、三百六十きれ、十二貫九百六十文、御うらきぬ一疋、一貫三百、御てうれう百疋、はらしろ四すち、一丈二尺つゝ、一貫五百文、都合十六貫七百六十文也、

一御下のはかま、御たけ八丈八尺、御きぬ二疋、二貫

六百文、御色付御てうれうまて四貫文、都合六貫六百文、

一御ひあふき、よこめ、百三十疋、
一御こもとゆい、三十疋、
一御しゝたらひ、御からひつのぬの、一貫百四十文、
總以上六十一貫文也、井上方へ卅八貫六十文、御うら御色付御調料に廿二貫九百四十文、

井上に申付候分

一御なをし、六丈六尺、百四十きれ、九貫二百四十、
一御あこめ、四丈、百六十きれ、六貫四百文、
一御ひとへ、四丈、八十きれ、三貫二百文、
一御さしぬき、三丈三尺、三百きれ、九貫九百文、
一御こもとゆい、二十疋、
一御いと、四十疋、
以上廿九貫三百四十文也、

三日、辛丑、天晴、○今日御要脚廿五貫文被出候、井上に十三貫文渡了、可然物也、卅九錢不足之由申候、不多事候間、堪忍仕候へ之由申付了、○御きぬ六疋、六貫八百文、四日、壬寅、天晴、○御檜扇、二十花等、攝取院へ七十疋にて誂候、○御檜扇大澤長門守に申付候、十疋半也、旦半遣、攝取院へ二十疋遣、

五日、癸卯、天晴、

六日、甲辰、天晴、酉刻より雨降、○御指貫腹白四筋、一丈二尺つゝ、八十疋にて誂候、先二十疋遣云々、ぞく布一端取寄候、紅花先六斤七百五十也、御唐櫃にない布一丈取寄候、

七日、乙巳、雨降風吹、○御要脚五百疋申出、是迄卅貫也、

十二日、庚戌、天晴、○井上所より御服御要脚取に上候間、長橋へ申入候、千疋出候、井上方へ七百疋渡候、是迄廿貫渡了、此方へ以上四千疋出了、

廿三日、辛酉、天晴、○今日御直衣御指貫織出、井上持來了、

廿五日、癸亥、天晴、○攝取院へになの物二十疋遣、以上五十疋遣候、今二十疋也、

廿七日、乙丑、天晴、晚雪下、○檜扇出來、惡候間返遣了、

廿九日、丁卯、雪下、○檜扇又持來、又返遣了、

卅日、戊辰、天晴、○今日御服之物千疋出候、以上五十貫也、

殘十一貫歟、今日井上御單持來候、散々織出候間返遣了、要脚六貫渡候、是迄廿六貫渡了、殘三貫三百四十文歟、○御元服來月十◎廿カ四日之由了、

○十二月大

一日、己巳、天晴、

二日、庚午、長刻雪下、天晴、○今日井上御袙御單持來、御單練を出候、何も惡候間、叶候間敷由申候へ共、種々詫言仕了、一荷兩種任例持來無鹽調(ニ)、候了、御單に十疋半取候間敷由申て詫了、

四日、壬申、天晴、○御檜扇之繪十疋半にて、土佐刑部大輔に申付候了、○同金目蝶鳥、出來、卅にて沙汰候也、

八日、丙子、天晴、○從攝取院御檜扇之花梅六枝、松六枝、二十◎十カ等出來候て到來也、先日又二十疋進候、今二十疋未進也、

十日、戊寅、天晴、○宮御直衣、御しら、御絹一疋可調進由被仰出候、御調料半分五十疋、被出候、他所にて被仰付候事先代未聞事也、

十二日、庚辰、雪下、○御檜扇繪今日出來、殘半遣候、○御服之物五百疋出候、是迄五千五百疋也、殘而六百疋也、井上召寄、三貫三百四十文渡候了、是にて以上皆濟也、種々緩怠共申候、向後御寮織手他人可申付候也、近比曲事、御單散々織出候事、堅申付候處如此也、言語道斷事也、○御直衣御調料殘六十疋出候、是迄百十疋也、

十七日、乙酉、時雪下、○今日御服要脚殘六百疋出候、以上六十一貫也、皆出候、目出度々々々、

十九日、丁亥、時雪下、○今日御服共調進折紙、備右、御直衣、御袙、御ひとへ、御さしぬき、御下のはかま、御ひあふき、御こもどゆい以上等也、

廿二日、庚寅、晴、○今日御男裝束御直衣調進、殘者於准后御沙汰候、前代未聞事也、不可說々々々、○御檜扇のにな、御指貫之服◎腹カ白一丈二尺つゝなかし、以後者一丈つゝ可沙汰者也、

○永祿十一年十二月日、若宮御方御元服、御服御色目被略之、

御わらは裝束

一御冠放巾子、　一御直衣小袿、

一御袙被略之、　一御單被略之、

一御指貫二重織物、　一御下袴

一御檜扇略、　一御生之袴略、

一御こしつき同、　一御こもどゆひ

一御唐櫃同、

以上

同御男裝束

一御冠　一御直衣浮織綾しら、　一御指貫鳥たすき、

一御下袴被略之、　一御檜扇同、　一御唐櫃同、

御寮織手遠山右京進入道、小川與七郎等、御總用惡物之間不請取申之、仍遠山入道隆儀今度補御寮織手、御直衣、二色、御指貫二色、申付之、御總用尾州織田彈正忠信長三百貫進上云々、一向惡物也、仍少々被略之、又折中之儀也、

○十一月四日、旦二千疋請取之、傳奏萬里小路切封如此、折紙、

御元服總用之內二千疋、且可被相渡山科家雜掌之由所候也、恐々謹言、

萬里小路家雜掌
十一月四日　就　時　判

立入左京進殿(橋之通子也、)

御總用次之間、千疋を七百疋分に諸事被相渡之、各難調者也、但其分令馳走、○御冠二頭三百疋申付之、沙汰之、密々儀也、惡物之間、四貫三百文也、○御童裝束御直衣、◎以下缺文

諒闇幷御錫紵御服之事

後奈良院弘治三年十一月日、
豐樂門院天文四年三月日、

御錫紵御服目錄折中分二千疋、

一御冠一貫五百、　一布御袍一貫三百、　一同御半臂同襖、七百、

一御下襲一貫二百、　一布御單七百、　一布御帶百、

一御表袴七百、　一平絹御袙　一下御大口一貫三百、

一御小袖一貫七百、　一御襪二百、　一御檜扇七百、

一打敷布百、　一土高器二百、　一柳筥二百、
一縄御帯百、　一御小本結百、　一御唐櫃七百、
以上
諒闇御服
一御直衣二貫六百、　一生御袴二貫百、　一御湯帷七百、
一御單物三百、　一御調料三貫、
以上二千疋

○天文四年
正月、廿二日、○御服總用之事、於先度長橋局種々問合候處、御總用事一向無之間、諸事半下行之由被申候、然間折中分にて四千疋也、去大永六度、猶折中にて三千疋被出候、其半分之由被申候、中々調間敷候間、不及覺語之由申候、然者二千疋之分可被出之由候、絹布惡事可爲法外也、○今朝旦五百疋被出候了、○御檜扇五十にて申付候、手付卅遣了、○土高器二、五十にて申付了、
廿三日、○板一間十疋にて取寄、三色木二本四十にて召寄候、御唐櫃之用意也、○御冠九十疋に申付候、櫛田將監來候間對面、一盞勸候、手付三十疋遣了、○棒木廿にて召寄候了、
廿四日、○今日大工呼候、御唐櫃申付候、百廿遣了、○四寸針◎釘カ二連十二にて取寄候、殘竹針◎釘カ也、
廿五日、○御唐櫃不出來候間大工今日呼了、十疋廿遣了、櫃大小二申付候、○三色木一本卅にて召寄候、柳筥用也、○板間中五十にて召寄候了、○布越後二端九御小十疋、越中一端四十疋取寄候、絹半疋四十疋半、又一御下袴用疋一貫二百五十取了、
廿九日、○從長橋局御總用之內七百疋被出候、以上十二貫也、○御檜扇殘廿遣候、今日出來也、○櫛田方へ御冠代又三十疋遣、以上六十疋遣了、○縄御帶方へ十遣了、荒麻三、云々、
二月、一日、○高土器二、今日出來、五十遣了、○御檜扇之金目廿五遣了、
四日、○御總用之內五百疋出候、是迄千七百疋也、○

布二端七百廿に召寄了、○御襪絹六十五、御なか二召、御絲二百召寄候、其外卅八、御なか作帷作等也、
七日、○總用之內三百疋出候、是迄二千疋にてすみ候、○御冠之物百疋同被出了、○御絹三疋半四貫二百にて召寄了、○御調料三百疋也、
八日、○柳筥作卅遣了、○御冠出來持來、三十疋遣候、以上九十疋也、酒勸候、○八百餘惡錢不足卅了、
○弘治三年、後奈良院崩御之時、御錫紵幷諒闇御服之事、もと〳〵は五千疋出候を、ちかき程四千疋に折中候、大永六のたひ三千疋出候、此たひ又せつちうのよし、いろ〳〵御もんたう候へとも、中々てうしん申さしきよし、申つめ候て三千疋出候、又れうくわんの御とふらひの事も、下行ちやうに見え候はぬよし候へとも、申つめ候て百疋出候、うけとりひとつに候やうに、てんそうひろはしとのへまいり候折かみにとのへ候、
追申當寮々官御訪同百疋、請取申候也、

御錫紵御服御總用三千疋、所請取申如件、
弘治三年十二月二日　内藏寮目代重成（花押）
廣橋殿御雜掌
この御かふりの代は、へちに百五十疋、てんそうよりいたされ候、
りやうあんの御かふりは、てんそうより申つけられ候、又なかはし殿よりおほせつけられ候事も御入候、天文四のたひは、こなたへうけたまりにて、こなたよりも申つけて候、このたひはてんそうより申つけられ候、
諒闇御服
一御直衣　一御大口　一御湯帷此外御袋二、
御錫紵御服御目六
一御冠　一布御袍　一布御半臂
一同御襠　一布御下襲　一布御單
一布御帶　一布御表袴　一布下御大口

一御小袖　一御襪　一御檜扇
一打敷布　一土高器二、　一柳筥二、
一縄御帯　一御小本結　一御唐櫃
以上

弘治三年九月五日、後奈良院崩御之時、御錫紵御服色々、

一御冠（ほそゑい、六位のごとくにて、なわをえりて二すち、かたくはきぬにて、まへむもんさいみをはる也、）
一布御袍（御いろにぶいろ、すみとあをはなをませて、そめてはる也、けつえきわきあき候也、はたはこと〳〵くひねる、）
御身の御たけ、御まへ四尺五すん、御むねのおり六すん、御のほり四しやく三すん、御うしろ八しやく五すん、御のほり四也、御そてのひきたてぬいたて、二しやく、御そてのした、まへうしろ五すんつゝぬはす、以上四ちやう七しやく三すん、くひかみつゝみ御ぼたそていつる也、
一布御半臂（御いろおなし、はたいつれもこと〳〵く、）
御身の御たけ、御まへ三しやく三すん、御大くひ三しやく、御むねのおり八すん、御うしろ一しやく七すん、御ゑり御身のまへよりいて候也、
一同御禰（御いろおなし、すそわきひねる、）
たかさぬのの一はたはり、御ひたのかす左右（ひたりみぎ）に十二つゝ、御うしろに六たゝみ、（四たゝみになすほんあり、）
以上卅たゝみ也、ひたのひろさ一すん五ふんつゝ也、以上九しやく、御わすれをなし、御こし六しやく、ながらわりを四にちさく、たゝみてぬいくゝみて、つねのはかまのこしのごとくにさす也、
一布御下襲（御いろおなし、はたひねる、御そてのつけめ、まへ六すん、うしろ一尺二すん也、）
御身の御まへ四しやく一すん、御大くひ三しやく八すん、御ゑり御身のまへよりいつる、御ゑりさきはけんさき也、御身の御うしろ八しやく五すん、御そてのひきたて二しやく五ふん也、御むねのおり八すん也、以上三ちやう八しやく、

一布御單（御いろおなし、はたをひねる、以上御うらなしひとへ也、）
御身の御まへ四しやく一すん、御大くひ三しやく八すん、御ゑり御身のまへよりいつる也、御うしろ二しやく五すん、御むねのおり八すん、御そてのひきたて二しやく五ふん也、御そてのつけめ、御まへ六すん、御うしろ一しやく二すん、御わきのすそ九すんぬい候、御うしろせのぬいめ、上より一しやく四すん五ふん也、以上二ちやう五しやく六すん、
一布御帶（御いろおなし、）
◎上文錦なかさ七しやく五すん、ながらわり四にたゝみこむ也、
一布御表袴（御いろおなし、御うへのはかま、）
御たけ三しやく、四の、御こしのなかさ一ちやう也、ながらわりを二におりて、をしくゝみてさすへし、かへりまた四しやくつゝ、これも二にたゝむへし、になのいとかたのごとくすへし、ゑひすかけなし、御すそはひねる、以上二ちやう二しやく也、
一御下大口（したのくち、）
ぬひとへ也、御うらなしすゝし也、
御たけ二しやく八すん、六の也、御こし九しやく、ながらわりを四にたゝみて、三はりさしにぬいくゝむへし、御まへこしひた五、一しやく二すん、此なかさしはつし、兩はうに三すんつゝ、御うしろこし八すん、三、御こしまはるまへうしろのあひた三すん、御こし御まへのかたに二しやく五すんなかくさす也、以上三ちやう五しやく八すん、
一御小袖一わた入、御いろあをつるはみ、あをはなにすみすこしいれ候也、おもてしけなし、うらしけきぬ、
御身のたけ三しやく八すん、御大くひ三しやく五すん、御そてたけ一しやく四すん、御そてのひろさ七すん二ふん、御ゑりのひろさ三すん八ふん、以上三ちやう四しやく、
一御襪一（したくつ、）そくしろきへいけん、ねりはる、しけなしひとへ也、

御きぬ三しやく二すん八す◎ふんのなかさ也、たかさ七すん也、

一御槍扇御いろあをは

御いたかす廿五、こちいとになのいとあをくそむる也、にななかさ三すんつゝ、ひたりみき二すち、(四さかる) 御かなめてうこ也、しやくどう也、

一打敷布しろきぬの也、

なかさ三しやく五すん、四にたゝむ也、

一土高器二けた也、

◎上文鉄うへした五といりほど、六寸はりのまるさ、たかさ、七八すんほどなり、

一柳箱二、

三いろ木にてさた、一はなかさ一しやく七すん、ひろさ一しやく二すん、一はなかさ一しやく一すん、ひろさ八すん也、

一縄御帯このふと

なかさ七しやく五すん、あらそにわらをませてひたりなわ也、うへをかみやかみしゆくしの事也、にてまく也、ふとさほんともあり、

一御小本結

なかさ六しやく、御いろふしかねにてそとそむる也、

一御唐櫃うちのり

なかさ二しやく六すん五ふん、ひろさ一しやく六すん、たかさ一しやく四すん、あし六つく也、ふたのうへにはうもたせあり、同はうある也、

以上十八いろ、かす廿也、

此ほかけんしおほひ、もく六の外にまいる也、やかていろののちこなたへいつる也、

一しのはこの御おほひ、れりきぬしけ也、あかれそめ也、

二しやく五すん、二はたはり、四はうのはたをこまかにつふ〳〵とぬふ也、うらおもて以上一ちやう也、

一ほうけんの御おほひし、

四しやく五すん、二はたはり、ぬいやう以下おなし、以上一ちやう八しやく也、

同諒闇御服御色目

一御直衣御うちなし、すゝし、御いろくろつるはみ、ふしかれそめ也、とんくりいろともいふ也、以上二ちやう八しやく

御身の御たけ七しやく、御のはり六しやく七すん五ふん、御そてたけ二しやく一すん、以上一ちやう七しやく、御らん八しやく、御こし七しやく、以上六ちやう七しやく、御むねのおりめ六すん、御はた袖八すん、御らんのたかさ八すん、御おひとをし二すん、御こしはなからわりを四にたゝむ也、御きぬまへまへしけきぬ也、ちかき程しけなし、このたひもしけなしにてしん也、

一御大口御うちおもてともにすゝし、くわんさういろ、へにそめ、ちときいろ也、おもてしけなし、うらしけきぬ也、

なかさ三しやく八すん、六のはかま、御こしなかさ一ちやう、ひろさ二すん七ふん、御まち一はたはり、四ほう御まちのうへ一しやく、御もゝたちうへのふん一しやく三すん、御まへこしのひたのふん一しやく二すん、さしはつしりやうはうに四すんつゝ、御うしろこしのひろさ八すん、さしはつしおなし、まつうしろのあひた三すん、ひたりみきのいとにてさす也、御うしろこしあつかみ、御こしはなからわり也、まへ〳〵はしけきぬにて候へとも、このたひはしけなしにてしん候なり、

一御ゆかたひら湯帷一りようねの、ふつちうの上々、

御身の御たけ三しやく八すん、御大くひ三すん、おとし御袖たけ二しやく八すん、以上二ちやう四しやく五すん、御すそはひねる、そうはひとへぬい、御ゑりはかりはをしまきてぬうなり、

御装束ぬいたての定

御はうの御ぬいたてのちやう、いつくも御身御うしろのふん御たけ五尺七寸五分、御ゑりかたのきわよ

り御らんのつけきわまてのふん、御まゑおなし、ふたつにひきおりて、御ゑりかた御まゑのかたにあくるなり、御身まゑうしろのふん一丈一尺六寸、是は御かた身のふん、○御のほりさきのかみのひろさ三寸八ふん、御おうくひはつきかたのはんふん、○御むねのおり六寸、この間御もんなし、○御くひかみのまわり二尺一寸、○御袖のしたはくひのわなのあいた二寸のうち、○御はた袖ひろさ七寸、おもそてのひろさ一尺一寸、御袖の御身のかた一寸五分せはし、御袖のひきたて二尺三寸、○御はくひのわな八寸五分、御わなさきひろさ八寸八分、りやうはうおなし、○御おひとをし四寸、○御らんのひろさ八寸八ふん御あり、九寸御あり、さきのひろさ七寸二ふん、御らんのなかさ九尺、御らんの御おもてより御くひかみ出候、御うらにて御おもてをつゝみてくけ候なり、○御うらはあをはなのひきのり、御いとおもてのことくそむる、代百文、○御うらのきぬ四丈六尺、きぬ一ひきたり候はて、御袖一のふん五尺三寸はかり入候、

御下かさね御ぬいたての定

御袖たけ二尺四寸、ひろさ一尺三ふん、○御身御こゑりよりまゑ四尺六寸八ふん、○御身の御うしろ一丈五尺六ふん、ひろさ一尺五ふん、おめり二いろのふん五ふん、一は御うらなかのおめりは、あをはなのへいけん、○御ゑり御身の御まゑよりいて候、ひろさ二寸三ふん、○御おうくひ二寸五ふんおとし、すそのひろさ七寸、○袖のつけきわ、御むねのおりめより御まゑ一尺一寸五ふん、御うしろ五寸、御きよのおめり御袖の下四寸はかりよりなし、○御むねのおり八寸、○御おうくひ御袖の御うらはかりは、こそてはりいたひきにてはなし、○御いと卅文、

御うへのはかま御ぬいたての定

御たけ二尺九寸、御あしつきの下一尺二寸、○御もゝたちは御あしつきの下、○御うちは五寸はかりなかく候て、すそをなかへおりこみ候て、こわりのためにおかれ候、○すそのひろさ九寸二ふん、○御かゑりまたなかさ四尺、ひろさ三寸八ふん、御おもてのふん、御こしのおめりは四ふんはかりひろく候、○御こし一丈八寸五ふん、ひろさ一寸六ふん、御おもてのふん、御うらのおめり三ふんはかり、○御こし御うしろのふん一尺四寸五分、御まゑ八寸五ふんつゝ二、御こしの右のかたは二寸はかりみしかく候、左はなかし、○御になのあいた二尺五寸、つねのことし、○御こしさしいと、ひたりみきゑりひたの上を三はりさしにさし候、○になの御いと五尺にくゝられ候、ゑひすかけは候はす候、御ぬいいと卅、になのいと二百五十文、○御なかへはかみへ五寸はかりとゝき候はす候、一丈にて候、はりやうひきのり、○御うらのきぬ、御へにか所へ七尺つゝ二、御こし一丈二尺、みきれにしてつかわし候、

すゝしのあかき御はかまぬいたての定

御たけ二尺八寸五ふん、御もゝたち下より一尺三寸ひきおり、四のなり、御うしろこしのひたのひろさ一尺一寸二ふん、御まゑこしいたのひろさ一尺三寸二ふん、○御まち上より一尺、○御こしのなかさ八尺、○そうの御ぬいやう御まちまてあわせぬいなり、○御ひたはつねの人のはかまのことし、御まゑうしろのやう七□□、○御こしのさしはつし、うしろのかた二尺二寸、そのよまゑゑまわる、左の御こしのあいた二寸、○御こしのひろさ、なからわりおひろさ二寸にぬいたてゝ、三はりさしにくけ候、○御いとはすゝしそめし、御こしさしいともそめ候、○御へにかたへの御きぬ、御たけとり三丈二尺四寸、ようふんまて、ふたにもすゝしの御はかまとかく、

御はりはかまぬいたての定

御たけ六尺二寸五ふん、ひきおり六のはかま、このうち二のはみしかく候て、これもひきちかへにて御まちになり候、○御まちのうへより五寸、○御もゝたちかみより一尺七寸五ふん、○御こしのなかさ一丈二尺、

ひろさわ一はたはりを四におるなり、御まゑ御こしのさしはつし四尺九寸、このほかうしろへまわる、○御こしのひたはまゑうしろともにつねのはかまのまゑのごとし、ひたひろさ一尺五寸五分、せんこおなし、○わきひたのおりめより御こしをさす、わきひたのひろさわ三寸五ふん、○ひたりの御こしのひきまわしのさしはつしのあいた五寸、○ぬいやうはそうをぬいて、りやうの御もゝたちのしもよりぬいあけ候て、とめ候へく候、御いとあかくそめまいらせて、御こしさしいとは、御うへのはかまのになのいとよりいで丶、みきひたりくれない、○御きぬ御たけとり御かたはかま三丈八尺五寸つゝ二、ようふんまて、御こし一丈三尺ようふんまて、

御ゆかたひらの御たちめ

御身の御たけ四尺一寸、御おうくひ四寸おとし、御袖三尺、御ゑりひろさ四寸五ふん、布のひろさ一尺、以上二丈六尺、

御こそて御ふく御たちめ

御袖たけ二尺八寸、御身の御たけ三尺八寸五ふん、御ゑりのひろさ四寸一ふんはかり、御そ◎て脱カのひろさ七寸五ふん、御大くひつねのごとし、御きぬ一ひきにてはたり候はて、御大くひ入候、御なか上かさねに五十◎文脱カめ、下かさねに卅文め、御ぬいやうはつねのごとし、○御きせきぬの事、三月むまの日まいる也、御きせきぬとあれは、はりきぬ三尺まいる、當年は二尺二三寸まいる、きれ候はて、又七らい◎色カと被仰候へは、七いろきれをまいらせ候、あかき、しろ、き、あを、はなた、もゑき、ふしかね、きれのありやうほそなかくても、又四五寸四ほうにも、◎以下缺文

◎右別記、原本京都市渡邊孫左衛門氏ノ所藏ナリ、今同氏ノ快諾ヲ得テ、謄寫シテコヽニ掲ゲルコトトセリ、蓋シ該記ハ本書中ニ著者ノ所謂別記トハ、又異レルガ如シ、

言繼卿記第四 終

大正四年三月二十日印刷
大正四年三月廿五日發行

（言繼卿記第四）
非賣品

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會代表者
編輯兼發行者　早川純三郎

東京市芝區櫻田和泉町七番地
印刷者　高宗啓藏

東京市芝區櫻田和泉町七番地
印刷所　國書刊行會第二工場

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
發行所　國書刊行會

不許複製

終